マックス・ヴェーバーを巡る人物達の書簡のタイプ打ち

羽入辰郎[1)]*
1）青森県立保健大学

Key Words　①マックス・ヴェーバー②エミー・バウムガルテン③精神疾患

Ⅰ．はじめに

研究代表者は 2007 年に『マックス・ヴェーバーの哀しみ――生を母親に貪り喰われた男』（PHP 新書）を上梓し、そこでヴェーバーの精神疾患の原因を、厳格なカルヴィニストであった父親に育てられたヴェーバーの母親に求め、彼の代表作『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』のテーマが、これまで考えられてきたようなプロテスタンティズムの禁欲的職業倫理の称揚にではなく、むしろ自分を苦しめた職業人しか完全な人間ではないとする、カルヴィニズムに淵源する母の価値観の貶めであったことを論証した。ただし、そこで使い得た資料は妻マリアンネによる『伝記』と、同じくマリアンネによって編纂された『青年時代の手紙』に過ぎなかった。

Ⅱ．目的

上記の拙著で得られた結論のうち、最も重要なものは、妻マリアンネと結婚する前、双方が淡い恋心を抱いた従妹エミー・バウムガルテンの存在である。エミーは精神的に非常に鋭い女性であり、研究代表者による拙著が初めて指摘したことで、これまで全く気づかれてこなかったことであるが、ヴェーバーの精神疾患を予言しているのである。ところが、あれだけヴェーバー宛の手紙を縦横に使い、立体的な人物像を描き出しているマリアンネによる『伝記』が、エミーの手紙を一通しか引用しておらず、それもヴェーバーが死んだ後の悲痛な手紙一通に過ぎないのである。現在刊行中の新しいヴェーバー全集で、ヴェーバーの手紙は続々と刊行されている。ただし、それはヴェーバー自身の手紙に過ぎない。必要なのはヴェーバー自身の手紙だけではなく、ヴェーバーを巡る周囲の人物たちの、特にエミーの手紙なのである。エミーの人となりを具体的に示してくれる手紙、必要なのはそれである。

Ⅲ．研究方法

１．バイエルン国立図書館からの手紙の入手

マックス・ヴェーバーを巡る人物たちの書簡の保存状況は非常に悪い。バイエルン国立図書館に所蔵されているものが殆どだ、と聞き、スキャナーで画像に写し取り、USB メモリーで送ってもらうよう依頼した。遺族への了解は、全集編纂委員の一人である M. Rainer Lepsius が行ってくれた。バイエルン国立図書館の担当者は当初厄介な作業を嫌がり、コピーが欲しければドイツに来い、とまで言ってきたが、Lepsius が介入してくれてから態度が豹変し、慇懃で親切丁寧になった。Lepsius は研究代表者がドイツとフランスで発表した論文を知っていたと思われる。遺族への了解が取れていなかった、ということは、まだ世界で誰もこの資料に手を付けた者がいないことを意味する。

*連絡先：〒030-8505　青森市浜館間瀬 58-1　E-mail: t_hanyu@auhw.ac.jp

２．タイプ打ちの計画

送られて来たスキャナーの画像をプリントアウトしてみて分かったことは、昔のドイツ人の筆記体の文字は全く読めない、ということであった。これは研究代表者ばかりではなく、ドイツでネイティブチェックをしてもらっている若い Ute Wielandt にも全く読めない、という。筆記体の読める年配のドイツ人にタイプ打ちを頼むしか方法はなかったが、当時科研費は全く通らず、また審査の評価も低かったので、本学の特別研究費も取れず、研究は断念せざるを得なかった。

３．特別研究費の取得とタイプ打ち

科研費の申請をすれば、評価に関わらず特別研究費を取得出来るよう制度が変わったことを聞き、科研費を申請した。相変わらず科研費は通らなかったが、特別研究費は頂けることになった。早速 Ute Wielandt に人選を依頼し、何名かの候補者の中から Eric Wychlacz を選んだ。Eric は当初、判読不可能な部分を推測でタイプ打ちしてきたりしたが、学問的にはそれではいけない、不明な部分は不明な部分のままで、注を付けなければいけない、と教えたところ、非常に厳密な仕事をしてくるようになった。3 月末で全部のタイプ打ちが終わる予定である。

Ⅳ．考察

タイプ打ちで分かったことは、エミーからヴェーバーの母ヘレーネ宛の手紙が大量に含まれていたことであった。これは全く予期していなかった成果であった。エミーがどういう人物であったかの資料は、これで大量に得られることになる。現在、研究代表者は拙著『マックス・ヴェーバーの犯罪』のドイツ語版と日本語版からの英訳に忙殺されており、タイプ打ちされた原稿を精査する時間的余裕がないが、英訳はあと二か月ほどで終わる見込みである。その後、タイプ打ちされた書簡の読み込みに入る。手紙のドイツ文というのは、文通し合っている当事者たちには当然の了解というものが書かれていないため、非常に難しい。Eric には、契約終了後も不明なドイツ語部分に関しては答えてくれる了解は取ってあり、不明な部分は質問してゆく予定である。

結局、痛感したのは、世界で最先端の研究というのは、日本では理解されない、ということである。科研費が連年で落ちていることが、それを証明している。特別研究費を頂けたことで、マックス・ヴェーバーを巡る人物たちの書簡の研究が世界で初めて可能となった。現在はネットの時代である。日本に居ながらにして、ドイツにいるドイツ人にネイティブチェックを依頼することも出来、貴重資料を海外の図書館からスキャナーで依頼することも出来る。青森という地の利の悪さは、ネットの世界ではもはや存在しない。青森にいても、海外と互角に、いや、互角以上に戦えるのである。

Ⅵ．文献

羽入辰郎『マックス・ヴェーバーの哀しみ――一生を母親に貪り喰われた男』（PHP 新書）2007 年

Ⅶ．発表（誌上発表、学会発表）

これから読み込みの段階なので、発表は未定。